



スハルト大統領と会談する筆者（左）

昭和 22 年会社をつくったときは 19 万円の払込みにも窮したほどで、また仕事はなく、従業員全員、社長から備員に至るまで一率に毎月 500 円の月給でしのいだものであった。今は社長も役員も世間一般的なみの給料を払い、従業員も戦前からのもののほか毎年新卒業生が入っており、入社には試験があるほどの人気になってきた。

国外では、今インドネシア、マレーシア、ネパール、タイなどの東南アジア、シリア、ヨルダン、その他の中近東、ギニア、ナイゼリヤ、ガボンなどの西アフリカ、ことにパプアニューギニアでは 180 万 kW の大水力の開発に手をつけている。中南米にも何度も手をつけており、海外だけでも 150 人以上の社員が働いている。

海外でも、私および私の社の者たちは関係者に好かれている。これは最も大事なことで、これには誠意が物をいうと思う。また、納得のいく説得が必要である。私自身としては各国のトップに愛された。ベトナム大統領のゴ・ディンデムさん、インドネシアのスカルノさん、アフリカ・ガーナのエンクルマさんなど、皆えらい人たちであったが、いずれも私を顧問的に扱ってくれた。政治というものは、これらの人たちに不幸な終止符を打ってしまった。

あるいは逸話になるかも知れぬエンクルマさんと私との一席の話。それは彼は私の年令を聞き、あまりの老令であるのに驚き、何を食ってそんなに若いのかと聞くので、私は「仕事を食って若い」と答えると、列席の皆と一っしょに感動の声をあげてくれたので、私はすかさず「もっと食物を下さい」といって数多くのプロジェクトをいただいたことがある。

7. これから土木技術者になられる方々へ

最後に土木屋と家族生活について一言したい。私は現場づとめをやっているとき妻をもらった。現場の住居は不自由であったが金は残った。家内はそれを貯金し、家

計をきちんとして、あるとき婦人雑誌に勤め人の家計という題で投書したら一等賞をもらったことがある。実践であるので真実味があったのであろう。その後朝鮮の現場で住いを持った。会社の主脳である私が現場に住んでいたのである。家内は今でも現場生活が楽しかったと言っている。

若い土木屋さん、ことにまだ学生である人たちに一言する。あなた方はなんで土木のコースを取るようになったか。土木は自然と戦うもので、田舎の不便な所をその仕事場とするのは当然である。文化生活を考えるようでは、すでにあなた方の道の選び方が間違っていたのだ。しかし、そんな生活をしなくちゃならない職席を持つ人にも、よい奥さんがくる。よい家庭ができる。気を取り直して山奥の現場に向かいなさい。これは、戦前求められて私が東大の学生にお話した一節である。

② 諸要因からみた土木技術者の社会的位置づけ

富岡 征一郎*

わが国の土木技術者の社会的位置づけが現在どのようになっているのかをいくつかの要因別に数値をとらえながら述べてみたい。

まず最初に、世間一般の人が建設業者に対してどのような企業イメージを抱いているかについて、毎日新聞社が行った第 16 回全国企業認識度調査の結果を参考にし、概観してみよう。表-1 は、代表的な建設業 3 社を選び回答結果をまとめたものである。本表から読み取れるように、企業の知名度は企業人と学生との間ではかなりの差がみられ、したがって、各調査項目別の結果にもその差が現われてきている。また、ここにあげた 3 社間にも回答結果の差が相当あるため、建設業に対するイメージを他産業のそれと比較して総括的に述べることは大変難しいが、あえて比較してみると、一般に建設業は、① 保守性が目立つ、② 広告が少ない、③ 広報活動がじょうずでない、④ 公害防止に努力していない、⑤ 技術開発に熱心、などのイメージがあるようである。公害防止については企業人と学生の抱くイメージが、きわめてかけ離れていることは興味深い。また、企業の社会的責任

* 正会員 鹿島建設(株)重役室土木企画部

表-1 企業認識度調査結果

企業・回答者グループ		建設業A社		建設業B社		建設業C社	
		企業管理職	学生	企業管理職	学生	企業管理職	学生
・知名度		99.3	90.7	99.8	97.7	98.6	68.2
・知名状況	企業内容や動向	32.5	7.8	36.4	11.6	32.2	6.2
	製品やサービス程度	41.3	23.3	42.9	30.2	40.7	13.2
	名前だけ	25.6	59.7	20.4	55.8	25.7	48.8
	知らない	0.7	9.3	0.3	2.3	1.4	31.8
・イメージとして保守的	そう思う	34.8	29.1	36.2	36.9	36.6	27.8
	そう思わない	36.7	23.1	46.4	26.6	37.7	18.8
	わからない	28.5	47.9	17.4	36.5	25.7	53.4
・技術開発や新製品開発に熱心	そう思う	32.5	24.4	67.7	36.5	37.8	20.5
	そう思わない	17.6	13.2	4.7	9.5	16.7	10.8
	わからない	49.9	62.4	27.6	54.0	45.5	68.8
・広告をよくみかける	よくみかける	24.2	26.5	39.2	29.4	25.3	14.2
	たまにみかける	41.3	45.7	38.9	41.7	42.2	43.2
	みかけない	34.5	27.8	21.9	29.0	32.5	42.6
・広報（PR）活動がしつこい	そう思う	13.3	17.5	42.6	23.8	16.2	9.7
	そう思わない	32.7	29.9	18.2	26.2	28.8	26.1
	わからない	54.0	52.6	39.2	50.0	55.0	64.2
・社会の動きを先どりしている	そう思う	26.4	27.8	63.9	42.1	32.6	23.9
	そう思わない	23.6	22.6	8.6	17.1	21.2	17.0
	わからない	50.0	49.6	27.5	40.9	46.2	59.1
・企業の社会的責任を自覚している	そう思う	28.7	22.2	53.6	23.0	42.9	15.9
	そう思わない	11.0	27.4	8.8	27.4	9.6	27.3
	わからない	50.3	50.4	37.6	49.6	47.5	56.8
・公害防止に努力している	そう思う	33.4	10.7	38.1	13.1	35.8	9.7
	そう思わない	7.5	32.9	7.0	34.1	6.8	34.1
	公害に無関係	8.3	9.8	7.8	11.5	8.6	11.4
	わからない	50.9	46.6	47.1	41.3	48.8	44.9
・若い人の就職先としてよい	そう思う	65.4	51.7	76.4	57.5	66.8	48.9
	そう思わない	7.0	14.1	7.7	16.7	6.0	11.4
	わからない	27.6	34.2	16.9	25.8	27.2	39.8

注：回答者数に占める比率。

の自覚および広報活動のうまさについては、企業間で抱かれているイメージが相当異なっている。

これら建設業者に対して回答者から出された注文事項の中から主なものをあげると、企業管理職からは

- ① 企業の近代化
- ② 海外進出の積極化
- ③ 企業のイメージをスマートに
- ④ 環境保全

学生からは

- ① 環境保全
- ② 安全性確立
- ③ 技術革新とPRの推進
- ④ 大衆との結びつき強化

などで、回答者グループにより注目事項もかなり差があることがわかる。

本アンケート調査結果で示された局外者のもっている企業イメージを建設業の内部にいる者からみると、われわれが日常漠然と抱いているイメージと多くの点で異な

っており、両者をオーバーラップさせることは、なかなか難しいように感じられる。だからといって、われわれ建設業に携わる者は一般大衆の抱くイメージを別世界のものとして無視するのではなく、建設業については建設技術者のイメージづくりに大いに役立てていく必要があるようである。

次に、収入面から建設技術者の一般的な位置づけをみてみたい。なお、以下に述べる各項の数値は、原則として資本金5億円以上、従業員500人以上の企業についての平均値で示したものである。これは、登録・許可業者数だけで39万社と零細化の著しい建設業界にあっては全業者の平均値にかたよりが生じ、同一レベルでの他産業との比較が難しくなるので、判断基準としては、かえって正当であると思われる。表-2は年間所得、モデル賃金の最高・最低およびモデル賃金の平均についてまとめたものである。なお、ここにいうモデル賃金とは、産業別に男女別、学歴別、職工員別に一定の年令、勤続年数、家族数などのモデルを設定し、これに合わせて賃金体系から理論的に推定した基準内賃金（本給、能力給、勤続給、家族手当、地域給、役付手当など）である。モデル賃金に含まれないものには、時間外手当、日直・宿直手当、早出・休日出勤手当、交通費、食事手当、住宅手当などがある。モデル賃金については、建設業における大学卒男子職員の平均値は各年令層とも全産業平均を下回っているが、高校卒男子職員のほうは年令が増加するにつれ全産業平均を上回る傾向にある。建設業における特徴は、業界の最高、最低の幅が他産業に比し小さいことで、ある規模以上の建設会社では給与面からみた待遇はあまり差がないことである。また、年間所得については、モデル賃金の差を反映して建設業は全産業平均を若干下回っている。ただし、モデル年間所得は基準内賃金をもとに算定されたものであるため、時間外手当、日直・宿直手当、休日・夜勤手当など基準外賃金が他産業に比し多い建設業における実際の所得は、表中の数値だけで多少を論ずることは難しいかもしれない。参考までに賃金項目別の賃金構成比率を表-3に示した。

次に、初任給（賃上げ後確定初任給）についてみると（表-4）、建設業の大卒男子職員の初任給は50年度にお

表-2 建設業におけるモデル賃金

(a) 産業別年間所得
(モデル賃金(基準内)×12か月+ボーナス)

区 分	昭和49年 (千円)	昭和50年 (千円)	前年比 (%)
全産業平均	2446	2708	10.7
建設業	2289	2609	14.0
商業(最高)	2979	3250	9.1
輸送用機器製造業(最低)	2272	2376	4.6

(b) 業種別にみたモデル賃金の最高・最低・平均(千円)

(1) 男子大学卒職員

区 分	22才	30才	35才	40才	45才	50才	55才
全産業	最高	112.0	222.3	299.8	339.0	404.7	513.3
	最低	76.1	110.9	145.2	181.2	204.0	206.6
	平均	92.5	155.6	197.1	245.6	276.3	322.6
建設業	最高	98.0	167.5	225.0	277.5	310.6	345.3
	最低	84.0	135.3	155.0	206.0	213.0	254.0
	平均	88.8	148.5	196.5	240.5	270.1	310.4

(2) 男子高校卒職員

区 分	18才	25才	30才	35才	40才	45才	50才
全産業	最高	92.1	144.5	222.3	267.5	305.2	370.7
	最低	62.9	84.5	107.9	136.5	153.0	165.0
	平均	75.8	107.9	147.6	181.9	215.5	250.3
建設業	最高	85.0	129.4	165.8	225.0	275.5	310.6
	最低	70.0	98.5	132.1	155.0	160.0	165.5
	平均	74.2	110.1	145.4	190.5	224.0	253.7

注：東洋経済新報社：賃金総覧，1976年版，による。

いて伸び率が小さかったため全産業の中で低い水準にある。高卒男子職員についても全産業平均を若干下回っている。

表-5 はモデル・ボーナスを示したもので、ここでも建設業は全産業平均よりも劣っている。

表-6 はモデル退職金を示したものであるが、49年以降、建設業における退職金は全産業平均を上回っているがこれは最高、最低の幅が小さい。すなわち、企業間隔差が相対的に小さいためであろうと思われる。

最後に、実労働時間数についてみると、表-7 に示すように、建設業はその業務の性格上、他産業に比し概して多くなっており、特に他産業が年々実労働時間数が減少の傾向にあるにもかかわらず、建設業においては、必ずしも減少していないことが注目される。他産業において労働時間

数が減少している事実は、週休2日制の普及状況からも容易に想像しうる。他産業においては半数近い企業でなんらかの形で週休2日制を実施しており、完全週休2日制の実施率でさえ16%強にものぼり、さらに操業度の低下もあって労働時間は減少の一途をたどっているものと考えられる。一方、建設業にあっては、週休2日制の実施率はきわめて低く、しかも、建設現場においてはようやく完全週休体制の実施が叫ばれている状況であるうえに、建設工事という特殊性ゆえにある限度以上の労働時間の短縮は無理であるところから、容易には実績として現われてきにくいのであろう。

以上、数項目にわたり建設業の全産業中に占める位置づけを試みてきたが、数値上からみると建設業は全産業中平均水準以下で、その中で働く者、特に土や水を相手とし自然と戦っている土木技術者は本当に期待できぬ職業像の一つになっているのであろうか。ここで素朴な疑問が湧いてくる。われわれ土木技術者は、収入や労働時間の多寡で自分たちの職務を評価しあるいは評価されていると考えているのであろうか。もちろん収入も多く、家庭生活に割ける時間が多ければ、それに越したことはないであろう。しかしながら、生活の充足感は仕事に対する充実感、職務に対する満足感と全く無関係のものではないはずである。その意味では、業界としても働きたいのある職場、生きがいのある生活条件をつくり出す努力をすることはきわめて重要なことであろう。加えて、われわれ土木技術者が自分たちの職務のあるべき姿を見きわめ、われわれ自身と一般社会の人のイメージが一

表-3 賃金項目別の賃金構成比率

項目	所定内 賃金比率	基本給				業績給	勤務手当				
		計	仕事給	属人給	総合給		合計	役付手当	特 作 業 手 当	特 務 手 当	特 殊 手 当
全産業	90.9	84.6	35.3	17.4	31.8	2.7	3.8	2.1	0.2	0.1	
建設業	90.3	86.5	41.4	11.8	33.3	1.0	4.1	2.8	0.3	0.4	

項目	生活手当							その他 諸手当	所定外賃金比率
	技能手当	奨励手当	合計	家族手当	地域手当	通勤手当	住宅手当		
全産業	0.4	1.0	7.1	2.5	0.4	2.0	1.2	0.8	9.1
建設業	0.7	0.6	6.2	1.4	0.7	1.5	1.5	1.6	9.7

表-4 産業別初任給

区 分	昭和48年 (円)	昭和49年 (円)	昭和50年 (円)	
大学卒職員 (男子22才)	全産業	63713	83709	91037
	建設業		77154	86111
	最高		93262	99546
	最低		76373	86111
高校卒職員 (男子18才)	全産業	51772	68472	74481
	建設業		64322	73071
	最高		80343	85690
	最低		62206	68332

注：上場企業の賃上げ後確定初任給。

歩でも近づくよう意識改革を進めていくことが何よりも望まれるところである。

時代が移り、社会のニーズも多様化し、土木技術者に期待される役割も拡大してきたことを考えれば、社会的イメージの向上に要する努力はますます多かつ多様性を伴うであろう。すなわち、われわれ技術者内部の努力が必要であると同時に、他産業との協調、一般社会との融和など外部へ向かっての努力も重要視されることになると思われる。

ただ、建設業内部にあって、他産業と同様、働く者を取り巻く社会的環境が職務と生活両面の向上と前進を従来以上に要求している動向に歩調を合わさざるを得ない状況にあることは事実のようである。

こうした動きの中で、われわれは土木技術者になった

表-5 モデル・ボーナス

区 分	全従業員平均(円)			職員平均(円)		
	昭和49年夏	昭和49年冬	昭和50年夏	昭和49年夏	昭和49年冬	昭和50年夏
全産業	340 977	389 177	353 616	358 368	411 173	366 458
建設業	300 667	404 447	345 682	302 329	407 369	353 535
最高	615 160	721 088	675 273	615 160	721 088	675 273
最低	196 308	245 880	238 202	196 308	245 880	328 202

表-6 モデル退職金

(単位:万円)

区 分	合計(A+B)			最高	最低	一時金(A)	年金(B)	基準内賃金倍率
	48年	49年	50年					
全産業	1 004	1 164	1 329	2 762	343	1 151	178	44.8
建設業	961	1 212	1 590	1 687	1 399	1 287	303	43.6

注:大学卒男子職員(定年55才)

表-7 産業別総実労働時間数

(単位:時間/月)

区 分	昭和40年	昭和41年	昭和42年	昭和43年	昭和44年	昭和45年	昭和46年	昭和47年	昭和48年	昭和49年
全産業平均	192.9	193.2	193.0	192.7	190.0	187.7	185.7	184.7	183.1	176.2
建設業	194.7	197.6	195.2	193.4	193.4	192.7	189.9	189.5	192.0	190.9

注:労働省調べ

ことに誇りを抱き、物を創造することに喜びを覚え、自己の職務に全力投球することを忘れてはならない。自己の目ざす土木技術者像を追い求めて……。

配管工学ハンドブック 全2巻

S.シュワイゲラー原編 A5・①5000②4500円

川下研介・若林織生監訳 ドイツ配管技術界で指導的立場にある20数氏の協力を得て、配管の設計施工の際に不可欠な基本理論と応用技術をまとめたもの。各種配管の特性、計算法と検査法、防食技術、低・高温の断熱技術、計装技術などについて実務に直結した形で解説した。《全2巻完結》

衛生工学

徳平 淳著 A5・1900円

上水道と下水道にテーマをしぼって、著者の20数年にわたる上・下水道工学の講義の経験を十分活かして、現実の上・下水道施設がいかなる設計理論に基づいて作られ、どのような方法で運営されているかを、初学者にも無理なく理解できるように解説した入門書である〔森北土木工学全書16〕

〒102・東京都千代田区富士見1-4-11 ㊦森北出版 電話03-265-8341・振替東京1-34757

最新コンクリート工学

小林一輔著 A5・1800円

本書はコンクリート工学を初めて学ぶ読者を対象に、最近のコンクリート工学の研究成果を積極的にとり入れて基礎的な事項から説き起こしたテキストである。前半では材料としてのコンクリートの特性を、後半では施工にあたって注意すべき事項を簡潔に述べた。〔最新土木工学シリーズ9〕

道路施設工学

市原 薫・枝村俊郎共編 A5・4000円

地盤工学

鳥海 勲著〔新しい建築工学6〕 A5・1600円

新土木設計データブック 全2巻

成瀬勝武編集 B5・⑧8000円⑨9000円

土木施工データブック

成瀬勝武・谷藤正三・沼田政矩・種谷 実監修 B5・9800円